

stage



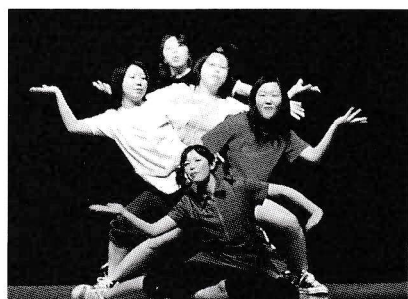
「あなたたちね、こんなステキな踊りが出来るのに、どうして昨日は出来なかったの。もしかしたら、リハーサルということでも力を抜いたんじゃないの。そんなのダメ。あなたたち高校生は演技力がないんだから、どんな時でも百パーセントの力を出し切らないとお客さんに想いは届きっこないんだから。あなたたちはあまい！」

ちよつときつい言葉だ。本番当日の午前中に行ったゲネプロ終了後の、振付担当の小林智栄先生の生徒への叱咤だ。続いて歌唱指導の横沢恵子先生だ。

「生きてみたかった」を、あなた方、本当にその想いで歌っているの？ 座敷わらしたちは生きてみたかったのよ。その想いが全然伝わってこないの。どうして？ ただ歌があるから歌ってるだけ。座敷わらしは生きられなかったのよ。その想いを客席に届けてあげてちょうだい。お願いっ！」

ミュージカルの台本を書くときに気をつかうのは、筋立ては勿論だが、歌とダンスを想定した作詞だ。今回は本質的には重いテーマということ、できるだけ明るい言葉を選んだ。いつものことだが、嵯峨昭彦先生はイメージ通りの曲をつくってくれた。

これまで五回のミュージカルは公民館ホールだった。張り出し舞台を足すものの、数十人のダンスには狭すぎる。舞台装置を考えるものの、ダンスのスペースや装置移動が不可能ということではほとんどがカット。それに対し、今回は公会堂。舞台も袖も広い。移動も可能。台本に、これまでにないくらい装置を細かく指定した。演劇部の発表はコンクールが中心というところで、装置は簡単なものが多い。せいぜいが薄ベニヤを使ったパネルだ。だから、ヌキを使った



本格的な装置をつくってもらおうと設計図を担当者に渡した。

「先生、四・五cm角のコワリを一ダース追加」「先生、ヌキが全然足りません」「先生……」年末から始まった装置づくりのメンバーから矢継ぎ早の電話。難しい父さんのアイデアを頂戴した。装置づくりと並行して色塗りも始まった。どんどん出来上がっていく。本番四日前に体育館に運んで組み立ててみる。うん、なかなか重量感あふれる装置に出来上がった。もちろん、補修しなければならなところもたくさん見つかった。大変だったのは後始末。ペンキのこびりついた二教室の床は二十数人の人海戦術でなんとかク

リア。

当日、朝八時半。舞台袖の暗がり一心に作業をしている生徒がいる。演出助手のT君だ。風呂場裏のカマドの中の薪を組み立てているのだ。客席からは見えないであろうに、彼にはこだわりがあるのだろう。僕はある確信を持った。五分前。序曲が始まった。嵯峨先生の弟さんの馬頭琴が不思議な雰囲気をもたし出している。いよいよ幕が上がった！

「銀河のヒトミ」の歌とダンス。うん。百二十パーセントのエネルギーではじけている。音響もバツチリだ。照明も、例の装置を引き立たせるべく、ちよつと控えめな明かりを用意してくれている。『生きてみたかった』には、座敷わらしの想いがキャストに乗り移っていた。胸にグツとくる曲想だ。

あ、T君が、雪の中であつた焼けただれたるべ井戸が登場した。ユタと座敷わらしたちとの別れの場だ。心情が井戸に凝縮され、なかなかいい構図になっている。

舞台を裏で支え続けたスタッフ陣、全力で舞台ではじけたキャスト陣。そして、たくさんのお客様の温かい声援。六十人の高校生たちの心が、舞台で一つになって、勢いよく舞台から放たれていた。

※特別番組以外全て午後7時30分～、料金／一般500円 高校生以下100円 ※料金改定しました！ 高校生以下は、特別番組以外100円でご覧になります。チケットはスペースベンにて販売。スペースベンの上演内容は、ホームページまたはメールマガジンでご確認下さい。

tsutomu_tanaka ☎070-5095-2028
スペースベンHPアドレス <http://spaceben.com/>
Eメールアドレス owner@spaceben.com

■演劇空間 スペースベン
八戸市柏崎1-11-8
☎ 0178-43-9876
FAX 050-3588-8350

六十個の心が一つになった舞台

〈文〉八戸聖ウルスラ学院高校教諭・演劇集団ぐめ企画代表 梶谷伸夫

演劇空間スペースベン

「上演データ」
文藝五〇周年記念
三浦哲郎文学フェスティバル
第六回三八地区高等学校演劇部
合同ミュージカル公演
『ユタとふしぎな仲間たち』
原作／三浦哲郎 脚本／梶谷伸夫
作曲／嵯峨昭彦 振付／小林智栄